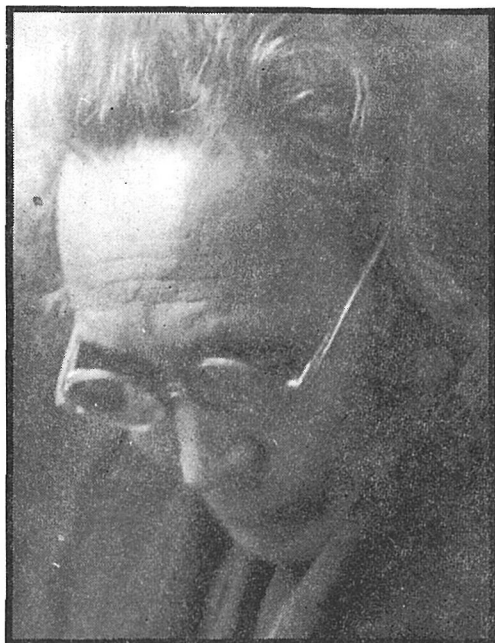


立花勝先生を偲ぶ



略歴

- 明治二十六年一月九日 福島県に生まる
 明治四十四年三月 福島県磐城中学校卒業
 大正十一年三月 京都帝国大学文学部哲学科卒業
 大正十一年三月 京都府立京都第一中学校教諭
 大正十三年四月 武蔵高等学校教授
 大正十五年四月 大谷大学助教授
 昭和七年四月 大谷大学教授
 昭和三十九年三月 依願退職
 昭和四十二年四月 大谷大学客員教授
 昭和四十六年四月 大谷大学非常勤講師
 昭和四十八年十一月三日 逝去

勲三等瑞宝章を授与さる

立花先生を偲ぶ

立命館大学助教授 寺崎峻輔

晩年の立花先生はいつも淡淡として、俗を超えられたところがあった。声は張りのある太いものであったが、眼が実にきれいでやさしかった。

先生の御宅は鞍馬口のすぐ近くにあったから、そこから鴨川河畔まではほんのわずかであった。散歩がお好きであった先生は、朝早くからそこへ出かけられるのが楽しみであり、日課であったと聞く。それは毎日規則正しく繰り返されていたが、それを聞き知った学生達は、河畔で先生が行われる体操をみるために、未明から河原にかくれて待ち伏せていたという。後日、その学生達によって先生の体操の様子が細かくわたって披露され、私達を大いに笑わせたものであった。しかし、そういうことを全く感知されない先生は、一人黙々として散歩と体操に親しまれ、桂病院に入院される直前まで続けられたという。

先生は日頃から御体を非常に大切にされる方であった。そのせいか頗るご丈夫であった。昨年春、桃山御陵にお伴をしたことがあったが、参道を歩かれる先生の足どりは速く、その強健さには驚かされたことであった。しかし、この先生の強健さも急激に衰った病魔の訪れには抗しきれず、手術後の先生は日に日に細

くなつてゆかれた。痛々しいほど病み細られたといったほうがよい。十月中旬、先生の求めに応じて病院にかけつけた折は、もうすでに発せられる言葉が言葉にならず、意味もなく虚空のなかに消えていったのを思い出す。

先生は、明治二十六年一月九日、福島県でお生れになり、大正十一年三月、京都帝国大学文学部を卒業された。専攻は哲学である。当時の京都大学文学部は京都学派の黄金時代といわれているように、教授陣に秀れた先生方を擁していた。そのなかで主として西田幾多郎先生と朝永三十郎先生の薫陶をうけられたと聞く。大正十五年、先生が大谷大学に奉職されたのはこの両先生の推挙によるといわれているが、以後五十年近く、研究と教育の両面にわたつて孜孜として大谷大学のために身を捧げられた。それは極めて地味なものであっただけに、かえって珠玉の光をはなつものであると考える。

先生には長い研究生活の成果から、自ら認められた論文の数も多い。そのなかで特にスピノザ関係のものが多くは、この清澄で孤高の哲学者に常に心魅かれておられたことを物語るとともに、先生の御人柄が偲ばれて清々しい。

昨年、先生は多くの先輩、同僚を失われて、お淋しそうであった。世良寿男先生がお亡くなりになった時がそうであった。世良先生の枕辺にじっとお坐りになったまま、遠い故郷でも想いおこすかのように、襟を正して学生時代の師と友人達のことを語っておられたことを思い出す。その淋しさはお亡くなるまで消えさることはなかったであろうが、それを温めたせめてもの慰めは、最後の最後まで続いた学生達との交流であったであろう。

とりわけ、入院されてからの先生と学生達とのつながりには、まことに太いものがあった。私はそれが実に美しくして人間的なものであったことを教えられたと思う。

私が先生と初めて接するようになったのは、私が大谷大学に奉職してからのことである。それは昭和四十一年からのことであるが、先生の長くて深い一生を知るには余りにも短い期間であっ

た。このたび、求めに応じて先生を偲ぶ一文を認めながら、その任にたえない私を哀しく思うし、先生も又心もとなく思っておられるにちがいない。

もうこれ以上、いたずらに私の蕪辭をかさねることをやめて、心から先生を偲ばれる方々の心胸に、もっともっと素晴らしい先生の面影を映じて欲しいと思う。